

オランダ社会の近代化と人々の性行動

石川 恭 成瀬 麻美

保健体育講座

Modernization of Dutch Society and Sexual Behavior

Takashi ISHIKAWA* and Mami NARUSE**

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

人間の性に関することがらは、昔から秘められ閉ざされた世界にあった。人々の性行動は、何かしら後ろめたさをもって見られていたからである。そのため近代社会において、人々の性行動に関する学術的な研究はほとんどない。オランダも例外ではなく、20世紀後半に至るまで人々の性行動の実態を客観的に知ることはできなかった。キリスト教の教義において、性に関わる婚前行為は罪だと考えられていたからである。しかし産業革命以降、近代化が進む中で、人々の価値観は多様化し、キリスト教の教義を遵守する伝統的な価値観をもった人は少なくなったと思われる。それにより、人々の性行動も解放化に向かったのではないか。このような疑問から、近代化と人々の性行動の関係について産業化の視点から取り組んだ。

まず、オランダにおける宗教人口を調べ、人々の宗教離れについて検討した。次に、社会生活における人々の性行動を調べるとともに、工場労働者の性に関する言動を明らかにした。第3に、非嫡出子から見た人々の性行動について産業化の視点から分析した。いずれも限られた資料からの文献研究である。

その結果、人々は社会の近代化とともに宗教生活から離れ、次第に個人の価値観に基づいた生活を営むようになった。近代化が進み、都市部で工場労働者が増加すると、人々の性行動は解放的になった。また、非嫡出子は、産業化が進んだ都市部の方が農村部より多かった。これは都市部において社会的統制が弱くなったためと考えられる。だが、これによって近代化がそのまま人々の性行動を解放的にしたとは言い切れない。地域性や、避妊行為、どのレベルでの性行動を性の解放化と捉えるかなどについて疑問が残るからである。

Keywords : オランダ、近代化、性行動

はじめに

昔から人間の性に関することがらは、罪悪感のもと、秘められ、閉ざされた世界にあった。そのため、真の姿を捉えることは難しい。だが、人々の性に関する行動は、いつの時代にも確かに存在した。むしろオランダも例外ではない。特に近代化が進んだ社会においては、人々の性行動やその価値観に何らかの変化が起きたのではないか。そのような疑問から、人々の性行動が解放化したと思われるオランダ社会を対象に、この課題に取り組むことにした。近代化による人々の内面的な価値観の変化について知りたかったからである。というのは、近代化が進むにつれて、人々の性に対する認識や行動が、より自由で解放的になると考え

たからである。

そこで本稿は、近代化にともなう人々の性に関する価値観や行動の変化を捉えるのに、性行動に着目した。ここでいう性行動とは、異性に対する何らかの性に関わる働きかけである。それは、性に関する言動であったり、性交渉と考えられる行為などである。

西欧において、性に関することがらは、宗教上の教えから、過去、しばしば抑圧されてきた。しかし、もし近代化により、人々の宗教離れが進んでいたならば、性行動が比較的自由で解放的になるのではないか。そこでまず、宗教人口と宗教活動について調べ、その上で、人々の性行動や非嫡出子の変化を明らかにし、そこから近代化と性行動の関係について考察することにした。このような視点からの研究は、これまでにない。

限られた資料を用いての文献研究であるが、筆者がこれまで取り組んできたオランダ社会の近代化研究の中で不明確であった点を、少しでも明らかにしたかった。

I. 宗教人口と宗教離れ

オランダの人々は、どのくらい宗教を信奉していたのだろうか。また時代によって、どの程度宗教心に違いが見られたのか。これを厳密に捉えることは難しい。というのは、人々の心のよりどころである宗教を、計量化することに無理があるからである。例えば、あるプロテスタント教徒が、プロテスタント派の教会に名前を登録していたとしても、その人が果たして敬虔な教徒であるかどうか分からない。毎週教会に通っていたかどうか、あるいは常にキリスト教の精神に即した生活を営んでいたか、それを知ることはできないのである。逆に、教会へ毎週日曜日に通っていたとしても、それが本人の意思によるものか、あるいは周囲

に強制されてなのか、知ることはできない。つまり、人々の宗教心については、厳密に把握することができない。

しかしながら、宗教派に登録している人数や割合を調べることで、ある程度は人々の宗教との関わりが把握できる。そこで、各宗教派に登録された人数を調べ、オランダの全人口に占める割合を算出してみた。

それが、表1に示した宗教人口と割合である。ここでは宗教派別の人口と、それが全人口に占める割合を示した。

表を見ると、いずれの宗教派も登録されている人数は増えているが、増加率に差がある。オランダ改革派のプロテスタントに比べて、カトリックの増加率は大きく、特に20世紀に入ってから、カトリック教徒の伸びが大きい。教徒数では、カトリックとオランダ改革派のプロテスタントに比べれば少ないが、改革派以外のプロテスタントの伸びが大きい。19世紀半ばには10万人台であったが、20世紀初めには70万人に達し、1940年代には100万人を越えた。オランダ改革派

表1 宗教人口と割合

(単位：人)

年	オランダの全人口	プロテスタント (オランダ改革派)	プロテスタント (改革派以外)	カトリック	ユダヤ教	その他の宗教派	無宗教
1815	2,177,768	1,207,000 (55.48%)		838,000 (38.31%)	36,800 (1.69%)	5,880 (0.27%)	
1829	2,613,487	1,554,888 (59.12%)		1,014,682 (38.82%)	46,397 (1.77%)	7,318 (0.28%)	
1839	2,860,559	1,704,275 (59.57%)		1,095,138 (38.28%)	52,245 (1.82%)	8,868 (0.31%)	
1849	3,056,879	1,676,682 (54.84%)	146,119 (4.78%)	1,166,256 (38.15%)	52,626 (1.91%)	8,254 (0.27%)	
1859	3,309,128	1,827,894 (55.24%)	117,369 (3.6%)	1,229,092 (37.14%)	63,790 (1.92%)	10,589 (0.32%)	
1869	3,579,529	1,967,110 (54.96%)	224,079 (6.26%)	1,307,765 (36.53%)	68,003 (1.89%)	11,812 (0.33%)	
1879	4,012,693	2,196,599 (54.74%)	271,659 (6.77%)	1,439,137 (35.86%)	81,693 (2.03%)	10,433 (0.26%)	12,253 (0.31%)
1889	4,511,415	2,204,948 (48.88%)	521,971 (11.57%)	1,596,482 (35.38%)	97,324 (2.15%)	23,910 (0.53%)	66,085 (1.47%)
1899	5,104,137	2,480,878 (48.61%)	588,507 (11.53%)	1,709,161 (33.57%)	104,180 (2.04%)	23,479 (0.46%)	115,179 (2.25%)
1909	5,858,175	2,597,921 (44.34%)	754,533 (12.88%)	2,053,021 (35.02%)	106,033 (1.81%)	52,137 (0.89%)	290,960 (4.96%)
1920	6,865,314	2,835,595 (41.31%)	855,418 (12.46%)	2,444,583 (35.61%)	109,845 (1.60%)	102,980 (1.5%)	533,714 (7.77%)
1930	7,935,565	2,744,288 (34.39%)	929,255 (11.71%)	2,890,022 (36.42%)	111,098 (1.4%)	120,621 (1.52%)	1,144,578 (14.33%)
1947	9,625,499	2,992,926 (31.10%)	1,103,082 (11.46%)	3,703,572 (38.47%)	144,382 (0.15%)	159,783 (1.66%)	1,641,214 (17.05%)

(Daalder 1985, p. 314 Wintle 2000, p. 28 CBS 1959, p. 26より作成)

注：宗教人口は、それぞれの宗教派に登録されている人数にもとづく。空欄は不明。

の伸びが小さかったなかで、それ以外のプロテスタントは大きく伸びた。オランダにおいて、オランダ改革派は古くからメジャーなプロテスタントであった。改革派以外のプロテスタントは、戒律がより厳しいものもあれば、逆に日常生活での締め付けが緩やかなものもあった。プロテスタントは多くの教派に分かれているが、オランダ改革派は人気を失っていた。これら宗教人口の変化には、オランダ特有の縦割り社会における柱の勢力や、政治的な力関係も影響しているが、カトリックが比較的教徒数を伸ばしたのは、日常生活における教会の締め付けが緩やかなことや、とりあえず登録する人の多いことが理由にあった。また、カトリックはプロテスタントに比べて、宗教行事や宗教芸術が華やかなことも関係していた (Franssen 1976, p. 420)。

ユダヤ教は、教徒数は増えたが、全体で見れば宗教人口は少ない。多民族国家のオランダでも、ユダヤ教徒は多くなかった。その他の宗教派も宗教人口は伸びているが、全体から見れば僅かである。ただ、多くの移民を受け入れているオランダでは、イスラム教徒やヒンズー教徒、あるいは仏教徒もいるため、数のうえでは時代とともに増加している。

注目すべきは、無宗教の人々である。1879年からその数は増えており、全体に占める割合も時代が進むにつれて高くなった。19世紀の間は、無宗教の人が全人口の2%以下だったのに、20世紀に入ってからは全体に占める割合が高くなり、1909年には約5%、1930年には14%を越えた。1879年にはオランダで無宗教の人がほとんどいなかったのに、1930年には7人に1人が無宗教派になった。各宗教派に形式的に登録している人も考慮に入れば、実際、宗教に関心をもたない人は、かなりの数に上ると推測される。時代が進むにつれて、人々の宗教離れが進んだと考えられる。

このことに関連して、フランセンは次のように言っている。

オランダにおけるカトリック教徒の生活は、19世紀後半になっても極端に形骸化することはなかった。多くの人は、依然としてカトリックに所属していた。しかし、それは結婚式や葬式のため、あるいは死後の魂の救済、つまり天国へ行きたいとの気持ちから、形式的に所属している人が多かった。だから宗教徒と無宗教徒の割合の変化を比較するだけで、社会生活における宗教の重みを判断するのは早計である。心底から宗教を信じ、教会へ通う人は減ったと考えられる (Franssen 1976, p. 420)。

つまり、キリスト教の精神を基礎に日常生活を営みながらも、真に宗教戒律や宗派の倫理観を貫いて生活を営んでいる人は少なかった。心のよりどころや冠婚葬祭、死後の行く末を案じて、とりあえず宗派に登録している人が多かった。となると、実際には人々の宗

教離れが進んでいた、より正確に言えば、宗教に根ざした生活は薄れていたと考えられる。

人々の宗教離れは、教会離れに現れた。特に休日の活動において、このことは顕著に現れた。人々は、教会で退屈な説教を聞くことより、趣味や創作活動など、日曜日を個人の楽しみに当てるようになった。

もちろん教会も、このような風潮に何の方策も取らなかったわけではない。教会の行事に一年を通して参加した子どもには、お菓子やプレゼントを与えたり、親子で教会に通えばパンの割引券を与えた。教会は人々の宗教離れを防ぐため、様々な方策を考え、できるだけ多くの人が教会へ足を運び、休日を過ごすよう努力した (Franssen 1976, p. 482)。

時代が進むにつれて、人々は宗教生活から離れ、次第に個人の価値観に基づいた社会生活を営むようになった。形式的には宗派に属していても、実際に敬虔な教徒は減少していた。逆に、無宗教の人が全人口の中で増えた。窮屈な戒律に縛られた宗教生活は、人々に馴染まなくなったのである。個人を中心にした、より自由な生活を望むようになったといえる。

II. 社会生活における性行動

キリスト教の価値観において、性に関することがらは、戒め的な悪い評価にあった。七つの大罪のひとつに性欲があるように、性行動は人間の堕落と罪の範疇にあった。そのため性は、長い間、公の場で話題にされることなく、秘め事として隠されてきた。

だが、表向きそうした価値観のなかで生きていた人々も、時代が進むにつれて、実際には厳格にキリスト教の教義や性倫理を守っていたわけではない。上層階級の間では、古くから浮気や不倫が日常茶飯事として、宮廷生活のなか、遊びとロマン感覚で行われていた。労働者階級とて、性欲を抑えきれず性行為に溺れていた者も多かった。売春行為は古くから存在し、半ば強制的な性行為もあった。キリスト教の倫理観において、性行為は結婚後の夫婦の愛情の結晶として子どもを授かる儀式であった。そのため、性行為自体を日常生活のなかで楽しむことは神に対する冒瀆であり、許されぬ行為であった。結婚前の男女の性行為は、教会によって厳しく戒められていた。

本段では、19世紀後半から20世紀前半の社会生活において、人々が性に関することがらをどのように捉え、行動していたのかを明らかにする。

一般的に19世紀の間、キリスト教徒は日曜日に教会へ二、三度足を運び、そこで過ごすのが普通であった。多くの若い男女が、教会で出会い結婚へと進んだ。こうした若者の交際スタイルが、教会にとって望ましい男女関係だった。祈りを捧げた後に教会の外でしばし世間話をする程度が、理想的な男女の付き合い方だっ

た。

しかし、20世紀に入ると若者の間で教会離れが起き、休日はそれぞれが個人の楽しみを追求するようになった。教会は、映画館やダンスホールでみられる若者の気軽な男女交遊が、安易な性行動へ進むことを警戒した。だが、このことは教会だけの問題でなかった。大人社会全般でも、若者の行動について、問題視する見方が多かった。

若者の間で流行った休日の過ごし方の一つに映画観賞があるが、映画の内容によっては、若い男女にかなりの性的刺激を与えた⁽¹⁾。ましてや男女と一緒に映画を見れば、内容によっては刺激を受け、その後の性行動に何らかの影響を及ぼすことも十分に考えられた。もちろんすべての映画に性描写があったわけではないが、性描写に対する解放的なムードが社会に与えた影響は大きかった。それまで民衆に対する性表現は、キリスト教の精神から控えられていた。あくまで個人的な男女関係のなかに封じ込まれていたのである。性を快楽やエンターテインメントとして扱うことは、道徳的・倫理的に許されなかった。それが映画の中で、ある程度まで自由に表現されるようになった。性の自由化・解放化が、庶民レベルで進んだ。

人々の性に関する道徳観について、客観的に示したデータはない。なぜなら、性の実体に関する調査は無いからである。仮にあったとしても、それがどの程度信頼できるか定かでない。というのも、性に対する考えや実体を正直に答える人がどの程度いたか、疑わしいからである。多くの人にとって性は、後ろめたい秘め事であった。事実、性道徳については、ビクトリア時代から偽善的な態度をとっていた人が多かった。そのため真の姿は、明確でないというのが通説である。(Franssen 1976, p. 432)

その中で、人々の性に関する行動について、多くの資料からできる限り客観的に記したのが、フランセンの調べた19世紀後半のデンボスの労働者の性に関する記述である。

記述によれば、19世紀後半のデンボスでは、男女の同棲について悪いイメージがもたれていた。同棲を止めさせようとするムードはあったが、労働者層は態度を変えなかった。工場経営者のなかには、労働者に対して、同棲を止めなければ解雇すると迫った者もいたが、結果的にあまり効果がなかった。つまり、この時代に同棲は、それほど特異なケースではなかった。

また、当時の労働者階級の生活と教育レベルを考えれば、彼らの性行動に何らかの規制をかけ、縛ることは無理があった。貧しい労働者の多くは一つの部屋に何人もの家族が同居しており、子どもは両親の性行為を見たり、年上の姉姉の裸を眼にしたりと、性的な刺激を小さい時から受けていた。性に関する教育は、学校ではもちろん、家庭内でも行われなかった。そのた

め、若い男女がある程度の年になって性に興味をもつのは、むしろ自然だった。生活空間と性に関する教育など、労働者を取りまく環境を考えれば、若者の性行動が早熟化するのには不思議でない。

デンボスの工場では、わいせつ行為の報告はないが、アムステルダムのろうそく工場では、監視が行き届かない深夜労働に、女工たちが男性からわいせつ行為を受けていた。工場労働における性的な問題は、男女と一緒に働く職場に限らなかった。女性だけの職場では、結婚している女性が、興味本位に夫婦の性行為を若い女性に話していた。工場に限らず全ての職場においてみられたのは、性に関する下品な言葉や性行為の生々しい情報が飛び交い、それを若者が聞いていたことである (Franssen 1976, pp. 432-435)。

男女の同棲や性に関する解放的な言動が、半ば普通に見られた一方で、これらを問題視するムードもあった。しかし、当時の生活環境や教育環境を考えれば、ある種、当然の帰結ともいべき状況下に労働者層は置かれていた。

労働者の性に関する行動については、レグトが19世紀後半から20世紀初めのオランダにおける工場労働者について、次のように記している。

労働者層の性に関する行動は、19世紀の間、市民階級から注目されていた。というより、正確には心配されていた。特に19世紀の後半に産業革命が進み、工場の建設ラッシュが起きると、それまで家内制工業や家政婦として働いていた女子労働者が工場で働くようになった。賃金がよいからである。すると工場内の職場では、狭い空間で、男女が共に作業するようになった。暑さのため薄着になり、汗で肌が透けるような状況に直面すれば、おのずと性的な刺激を受けた。そこでしばしば起きたのが、非道徳的な言動であった。性的な冗談や、異性の体に触れるなどの行為が工場内で起きたのである。このようなことがしばしば起きると、工場労働者から不満の声が高まり、経営者は男女の労働時間をずらしたり、仕事場を分けるなどの対策を取った。このように19世紀後半の工場では、性的な問題行動が頻繁に起きていた。しかし時代が進むにつれて、工場労働者の間では、男女が同じ空間で仕事を行うことに慣れ、普通のことと考えられるようになった。

しかし親は、娘が工場で働くことに依然として根強い抵抗感があった。たとえ賃金が安くても、工場で働くより家政婦として働く方がよいと考えていた。社会では、まだ女工に対する蔑視があったのである。女工は大声で話し、身だしなみがだらしく、品性に欠けるとの印象をもたれていた。家政婦や家事手伝いの女性でさえ、女工を見下げていた。だが、家政婦に比べて工場労働は、賃金の良さと自由時間が明確であったため、女性にとって魅力的な仕

事だった。

また、工場労働に携わる若い男女は、仕事が終わった後、一緒にカフェバーへ行ったり、ダンスホールへ行ったりした。時には酔って道で大声で叫んだりする者もいたため、大人から見れば非道徳的な行動を取る工場労働者が多いと思われていた。そのようななか、若い男女の間で妊娠後の結婚〔今でいうでき結婚〕が増えたため、若い工場労働者の男女交際は益々評判が悪くなった。だが、非嫡出子の数は、それほど多くなかった。たいていは、最終的に結婚したからである。ただ無計画な結婚や、教会の圧力によって結婚することになった者が数多くいた。

若者の性行動が自由化（当時の価値観ではルーズ化）していたことを受けて、教会や団体のなかには、結婚して9ヶ月以内に子どもを生まなかった夫婦に褒美を出したこともあった。これは、結婚するまで性交渉を行わないという建て前からであった。そのぐらい、若者の性行動が社会的に問題視されていた（Regt 1977, pp. 11-13）。

レグトは、労働者階級の若者の性行動について、かなり早い時期から性行為があったと見ている。狭い家の中で、子どものころから両親の性行為を目の当たりにしていたならば、性行為自体、珍しくなかったという。大人の行動に興味をもつ子どもは、早い時期から性行為に関心を示し、機会があれば性行為を行っていたとしても不思議ではないと主張する。

また、男女の同棲について、19世紀の終わりまでは都市で同棲するカップルが多くいたが、20世紀に入ると減って、結婚するカップルが増えた。結婚することで、社会的な援助や保障が得られるようになったからである。このことは、20世紀に入って非嫡出子の割合が減ったことから理解できる。

レグトとフランセンは、19世紀の労働者層の家庭で、子どもが両親あるいは兄弟の性行為を眼にすることは普通であり、それが早い時期の性行為につながったと考えている。また、工場労働において、男女間に問題行動があったという見方で一致している。

では、20世紀に入ると、工場労働者の性的問題行動は解消されたのだろうか。また、女性が工場労働に携わることに對する見方は変わったのだろうか。ここに、興味深い証言がある。当時、工場へ働きに出た経験をもつナーベル氏（Gerarda Naber）の証言である⁽²⁾。以下、その内容を記す。

氏が、北ホラント州の工場で働いたのは、1936年、16歳の時であった。彼女は興味から2週間のアルバイトを工場で行うことにした。だが、これを聞いた両親は大変怒った。2週間だけという約束でアルバイトに行くことを認めてもらった。

「工場での経験は信じられないものだった。男性

労働者の使う言葉は汚く、卑わいな冗談が飛び交い、雰囲気はかなり悪かった。3日間働いただけでやめたくなったが、契約上、2週間働くことになっていたの、仕方なく続けた。事務所に行って、もっと環境のよいところに配属して欲しいと頼んだ結果、服をたたむ部所に代わることができた。2週間後、もう二度と工場では働かないと思った。

当時、女性が工場で働くことは、よくないと考えられていた。不衛生な上、工場で男性と一緒に働くことは、汚い言葉やルーズな生活態度を身につけてしまうからである。そのため多くの場合、若い女性は家政婦の仕事に就いた。しかし、どうしても生活の苦しい家庭では、隣町の工場まで娘を働きに行かせた。隣町まで行かせたのは、近所への体裁からであった。友達は、一人も町の工場で働いていなかった。工場労働に行った女性の仕事は、男性の汚い作業着を洗うことだった。」

この証言から分かるように、20世紀になっても工場労働の職場環境はそれほど変わらなかった。やはり男性労働者の言動は問題が多く、女性に対して性的な冗談を言っていた。時代が進んでも、労働者の態度に大きな変化があったとは考えにくい。その裏付けとして、1936年になっても、両親は娘を工場へ働きに行かせたくなかった。娘が工場で働いていることを近所に知られると、体裁が悪かったのである。娘に対する悪い評判（異性交遊や性行為など）がたつことや、男性労働者の誘いに乗ってしまうことを心配したのである。嫁入り前の娘に傷を付けたくないといった心境であろう。それと、体面上、娘を工場に出すほど貧しいと近所に思われなくなかったのである。1930年代になっても、女性が工場労働に携わることは、依然として消極的な評価を受けていた。

Ⅲ. 非嫡出子からみた性行動

性行為の自由化と解放化を捉えるならば、結婚前の性行為経験について調べることが考えられる。しかし、これに関する資料はない。そこでしばしば用いられるのが、非嫡出子に関するデータである。非嫡出子は、性行為の自由化や解放化、あるいは性倫理の乱れを測る尺度として用いられてきた。

では、オランダにおける非嫡出子の数や割合はどうだったのか。これを記す前に嫡出性と非嫡出子について触れておきたい。

アメリカの社会学者グードは、社会における嫡出性について次のように述べている。

「生物学的要因と文化的要因との間の連鎖関係は、人間社会で嫡出性の規則を重要なものにしていく。その規則にしたがえば、子どもは、その集団や社会の慣習にしたがって婚姻関係にある両親の間に生ま

れた子でなければならない。(Goode 訳書 1991, 469 頁)」

このことは、いずれの社会においてもいえるが、特に文明化された社会では、婚姻という社会的承認を得ずに生物学的な親になれば、懲罰や社会的差別の対象となった。法律上、嫡出子と非嫡出子では、権利や待遇に様々な違いがあり、非嫡出子は世間から冷遇されることが多かった。文明社会は非嫡出子の出生を望まず、非嫡出子を出産した者は、倫理・道徳上、犯罪者扱いを受けてきた。特にキリスト教社会においては、教義上、そうしたことは容認されなかった。無責任な男、ふしだらな女として、様々な点で社会的な制裁を受けた。本来、結婚前の性交は許されず、成人男女は、性的に健全な関係でなければならなかった。つまり、非嫡出子の出産は、キリスト教の七つの大罪の一つである性欲に負けた者が、みだらな行為を行った証拠である。もちろん全ての者が、結婚前に清廉純潔であったわけではないが、証拠がない限り、宗教上の罪には問われない。このことから、非嫡出子の出生は、社会や集団の性倫理の乱れとして扱われた。

もともと結婚前の性交渉はそれほど珍しくなかったが、妊娠した場合には問題となった。淫らな行為に及んだことが明らかになるということもあるが、それ以上に、妊娠した女性と生まれてくる子どもをどうするかという現実問題に直面したからである。産業化が進む前は、女性が妊娠したら男性は責任を取って結婚するのが普通だった。周囲がそうさせたこともあるが、責任を取らなければその土地に居づらくなったからである。しかし産業化が進むにつれて、人間の移動が活発になると、土地に住む人の顔ぶれが変わりやすくなった。すると、長年同じ顔ぶれのなかで根付いていた、その土地の社会的コントロールが弱まった。それは妊娠した後の対応にも現れた。責任を取って結婚する男女ばかりではなくなったのである。閉鎖的で強い繋がりがなくなった共同体では、周囲から白い目で見られることが少なくなり、妊娠しても結婚しない男女が増えた⁽³⁾。また、女性が妊娠しても逃げてしまう男性が多かったことや、妊婦の中絶が難しかったこともあり、結局、女性が非嫡出子を出産するケースが多かった。男性側にも結婚が困難な理由はあった。無責任な男性もいたが、当時の若い男性の収入では、家庭をもつことは厳しかった。また、失業した後、新たな職に就くため、遠方に移り住む場合など、妊婦を置いていかなければならないこともあった。これらはオランダ全土において広く起きていた。

一般的にいつて18世紀の後半から、中央・西ヨーロッパでは、非嫡出子の割合が増えた。これは19世紀の終わりまで続いたが、その背景には産業革命の影響があった。

産業革命によって都市部に流れ込んだ多くの労働者

は、新天地で新たな生活を始めた。すると、それまで田舎の規律や性倫理に縛られていた人々が、都市部で新たな性関係をもつ機会ができた。都市部へ移り住んだ男性労働者の性的関心は高く、性行動が活発化して異性との性行為に及んだのである。

多くの非嫡出子を生んだ理由の一つには、こうした労働者の性行動があった。また、オランダにおいて労働者の間で若い男女の同棲が増えたのは、結婚費用を無駄と考える者が多かったからである。式を挙げて結婚すれば、パーティーや挨拶で多くの費用がかかる。そのため、妊娠しても式を挙げず、結婚しないままでいる若者が多くいた。基本的に非嫡出子は、貧しい人の間、労働者層に多かった。

非嫡出子が増えたもう一つの理由に、教会の道徳的影響力が弱まったとの見方がある。近代化が進むにつれて、人々の宗教への関心は低くなり、教会へ足を運ぶ頻度は減った。それまで地域の絶対的な存在であった教会は、人々の宗教離れによって、日常生活でもその影響力を失いつつあった。厳しい戒律や堅苦しい道徳観、小うるさい説教は、新しい時代の人間には受け入れられなくなった。もちろん教会の権威が、人々の社会生活において完全に失墜することはなかったが、それでも性に関する教えは、次第に重みを失っていた。表面的にはキリスト教の道徳観に縛られながらも、性に関する事柄は、次第に個人の問題と考えられるようになった。そのため、それまで戒められていた性行為が、ある程度まで自由化したことで、非嫡出子の増加を招いたと考えられる。

では、オランダにおける非嫡出子のデータを見てみよう。

図1はアムステルダムとその近郊地域における非嫡出子の割合を示している。大都市アムステルダムと、周辺の中規模都市、そして、郊外の田舎にある村の三地点で、全出生数に占める非嫡出子の割合を一世紀に渡って示している。この図から分かることは、都会と田舎で非嫡出子の出生に差があったかどうかである。

まず個別に非嫡出子の出生率の変化をみると、アムステルダムでは19世紀の初めに15%前後の高い割合を示している。これは7人に1人が非嫡出子であった計算になる。その後19世紀をかけて、非嫡出子の割合は低下したが、1870年頃から1890年頃にかけての20年間は7%前後で推移した。この時期は、オランダの産業革命期にあたる。そして世紀末から20世紀初めにかけて、再び非嫡出子の割合は減少して、1915年には5%程度となった。一世紀の間に非嫡出子の出生は、10%程度低下した。

周辺都市でも同じように、19世紀をかけて非嫡出子の割合は徐々に減少した。19世紀の初めには9%程度であったが、1880年頃には3%程度まで低下した。この後はそれほど変化がなく2%台であった。

アムステルダム郊外の田舎では、もともと非嫡出子の割合は低く、19世紀初めでも3%台であった。もとの値が低いため、その後の変化はあまりみられないが、それでも一世紀をかけて1%台まで低下した。

これらの三つの地域で非嫡出子の出生を比較すると大都市ほど割合が高く、田舎ほど低くなっている。近代化が進むにつれて、都市には多くの工場が建ち、工場労働者が移入してきた。当時、工場では、性に対するモラルが低下していたり、若い労働者間でしばしば同棲者がいたり、未婚の男女が性交へ進むケースは多々あった。また、都会には、多くの性的な刺激や欲望があった。これらの要因が、非嫡出子の高い出生率につながったと考えられる。その裏付けが、1870年から1890年にかけての産業革命期の非嫡出子の値である。周辺都市では非嫡出子の出生率が低下しているのに、大都市アムステルダムでは横這いである。これは周辺都市からアムステルダムへ、多くの工場労働者が移入したことによる。移入した工場労働者がアムステルダムで非嫡出子を出産したため、この時期のアムステルダムで非嫡出子の割合が減少しなかったのである。一方、周辺都市では、多くの若い労働者がアムステルダムへ出ていったため、この20年間、非嫡出子の割合は減少したと考えられる。

近郊の田舎では、都市に出ていった労働者もいたが、もともと自分の土地で農業や酪農に従事する者が多かったため、人の移入はそれほどなかった。そのため近代化の影響は、都市ほど顕著に現れなかった。工場が建つこともなく、都市にみられる誘惑もなく、比較的古い体質が維持され、性に関することがらも、昔

からのキリスト教の教えが守られていた。結婚するまで性交経験がなかったかどうかはわからないが、少なくとも非嫡出子の出産は村で許されなかった。未婚の男女に子どもができれば、すぐ結婚しなければならなかった。このことが田舎において、長きに渡り、非嫡出子の低い出生率を維持したのである。

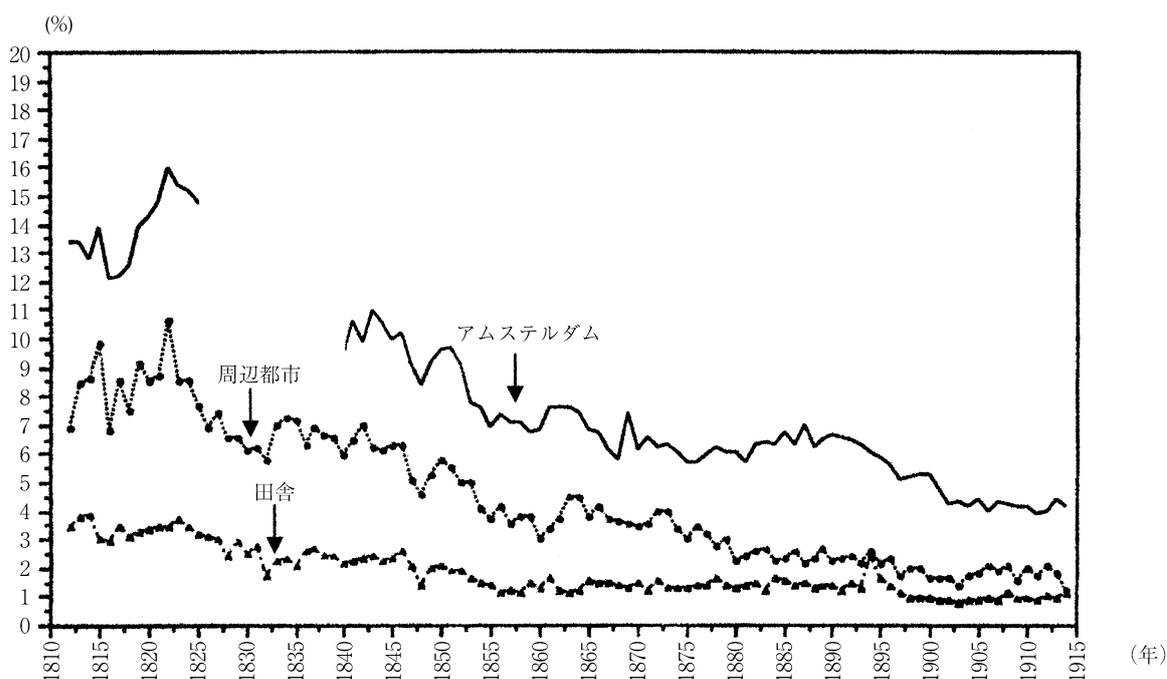
確かにアムステルダムでは、近郊地域と比べて非嫡出子の割合が高かったが、それでも一世紀の間はかなり低くなった。周辺都市や田舎と比べれば、減少幅はアムステルダムの方が大きい。これは労働者層にも性交と妊娠に関する知識が浸透したためである。また、下層階級の間に妊娠や出産に対する大人としての責任感がある程度浸透したと考えられる。

次に、地方の中規模都市の事例を見る。非嫡出子の出生には、地方都市ならではの要因も存在する。

表2は、19世紀後半の北ブラバント州における非嫡出子の数とその割合を示している。表を見てわかるように、北ブラバント州を代表する三つの都市の間で、非嫡出子の数とその割合に差がみられた。もちろん都市の規模によって非嫡出子の数は変わるが、非嫡出子の割合に格差が見られる。

これについては、次のような説明がある。

ブレダとデンボスの非嫡出子の割合がティルブルグに比べて高い値を示しているのは、ブレダとデンボスにオランダ軍の駐屯地があったからである。駐在していた兵士は、そこで知り合った女性と関係をもち、妊娠に至っても責任を取ろうとしなかった者が多かった。つまり、性行為の果てに妊娠したとしても、結婚に対する義務意識が希薄だった。妊娠し



(Kok 1991, p. 33より)

図1 アムステルダムとその近郊地域における非嫡出子の場合

た女性よりも、妊娠させた男性の方に、非嫡出子を増やした原因があった。もう一つの理由は、この二つの都市が、ティルブルグに比べて都市化が進んでいたため、社会的な統制が緩やかだったことが関係していた。性行為に対する感覚はティルブルグより自由で、性交を行ったら結婚するとか、結婚前に妊娠したら必ず責任を取って結婚するといった意識は希薄で、社会的な圧力も弱かった。そのため、駐屯している兵士がつくった非嫡出子だけでなく、都市に住んでいた男女の自由で解放的な、ある意味ルーズな価値観からできた非嫡出子が、高い割合を生んだ理由として挙げられる。

ティルブルグの場合、非嫡出子の割合が低いのは、妊娠と結婚に対する町の工場経営者の基本的な態度が関係していた。工場経営者は自分の工場で未婚の男女に子どもができた場合、結婚を強く迫るか、さもなければ労働者を解雇した。未婚の母を許さなかったのである。解雇されるのを恐れた労働者は、結局、結婚した。

非嫡出子は、収入の低い男女の間でできることが多かった。収入が少なければ結婚して子どもを育てることが難しいため、つい現実から逃げてしまったのである。また、彼らは貧困なばかりでなく、性感覚もルーズなことが多かった。性欲の赴くままに、性行為に及んだのである。非嫡出子は下層階級の間で最も多く、未婚の母となった女性は、家内で縫い物をしてわずかな金を稼いでいた。相手の男は工場労働者か兵士であることが多かった (Franssen 1976, p. 436)。

州全体の非嫡出子の数とその割合を年代別に見てみ

ると、幾つか特徴的な事がある。総数では1860年代前半まで増え、その後は減り、再び1880年代後半に増えている。非嫡出子の割合もこれに近い変化を示し、1870年代から1880年代にかけて低い値になっている。この理由ははっきりしないが、非嫡出子の数とその割合が低いのは、オランダの産業革命期と一致する。これは中規模都市であるという理由が一つ考えられる。中規模都市から大規模都市への若者の移住が関係していると思われる。またフランセンがいうように、非嫡出子は比較的収入の低い男女間に生まれるケースが多いのならば、産業革命期は工場労働による収入が安定していたため、その数や割合がここでも低くなったと考えられる。産業革命によって多くの工場が建てられ、働けば働くほど収入が得られたのならば、結婚して非嫡出子を産まずにすむ。また、仕事があれば、余分な時間や性欲も減る。これらの要因が、中規模都市の非嫡出子を減らしたと思われる。

以上から、非嫡出子の出生とその割合の違いには、様々な要因があると分かった。都市部では、工業化の発展に伴い多くの工場が建設されると、周辺地域から多数の労働者が移入した。特に若い労働者の間では、工場内の性に関する規律の乱れや同棲などによって、非嫡出子を生む割合が周辺地域より高くなった。それに対して田舎では、依然として保守的な体質が維持されていたため、非嫡出子の割合は低かった。大都市と田舎という要因以外にも、地方の中規模都市では独自の要因が存在した。北ブラバント州では、州を代表する三つの都市で非嫡出子の出生に差があったが、ここではそれぞれの都市において、都市化の程度や軍隊の駐留、工場経営者の方針などが影響を及ぼしていた。

表2 北ブラバント州における非嫡出子数とその割合

期 間	ブレダ		デンボス		ティルブルグ		州全体	
	人	%	人	%	人	%	人	%
1851-1855	232	9.7	273	7.3	58	2.7	1575	2.8
1856-1860	215	8.9	281	7.9	47	1.6	1645	2.9
1861-1865	242	9.5	269	7.1	43	1.4	1777	2.5
1866-1870	278	10.8	251	6.3	46	1.2	1717	2.6
1871-1875	230	8.2	264	6.4	51	1.0	1622	2.2
1876-1880	198	6.1	188	3.9	65	1.3	1426	1.9
1881-1885	174	4.8	187	3.9	58	1.1	1436	1.8
1886-1890	243	5.3	189	3.8	54	1.0	1699	2.1
1891-1895	220	4.9	182	3.6	60	1.0	1774	2.1
1896-1900	181	4.1	131	2.4	88	1.2	1658	1.8

(Franssen 1976, p. 436より)

注：ブレダ、デンボス、ティルブルグは、北ブラバント州の代表的な都市。
表中の(人)は非嫡出子数、(%)は出生数に占める非嫡出子の割合。

おわりに

人々の価値観の変化を宗教でみた結果、当時の人々は社会の近代化とともに宗教生活から離れ、次第に個人の価値観に基づいた社会生活を営むようになった。形式的には宗派に属していても、実際に敬虔な教徒は減った。窮屈な戒律に縛られた宗教生活は、時代が進むにつれて馴染まなくなった。このことは、人々が社会生活を営むうえで、様々な宗教的制約を離れ、自由に振る舞えるようになった反面、倫理・道徳上、問題があると思われる行動も表面化した。例えば、性に関することがらである。

近代化が進み、工場労働者が都市部で増加すると、労働者の間では同棲が数多く見られ、職場でも男女間で卑わいな冗談がしばしば交わされた。宗教倫理上、その様な言動は問題視されたが、宗教離れが進んでい中で、実際には日常的にみられた。近代化が、どの程度人々の性倫理や性行動に影響を与えたのかについて厳密な意味で明確にはできなかったが、近代化によって増えた工場労働者の中で性行動が解放的であったことは事実である。

非嫡出子については、数値だけで当時の性行為の自由化や解放化、あるいは性倫理の乱れを把握したことにならない。というのは、非嫡出子の数が未婚男女の性行為をそのまま示しているわけではないからである。避妊をして性行為に及んだこともあろうし、たまたま妊娠しなかったことも考えられる。結局、性行為の頻度やその状況は、非嫡出子のデータだけでは明らかにできない。そのため、あくまでも性行為と性倫理を見る上で、参考となる一つの指標と考えるべきである。

近代化が進むにつれて、人々の性に対する認識や行動が、より自由で解放的になったとの推測に立ち本稿を記した。結果、限られた資料を用いての考察であるため、明確な結論は出せなかった。ただ、近代化（工業化）が進むなかで、工場内では、性に関する非道徳的な言動が見られた。また、産業革命時には、農村部より都市部で非嫡出子の出生率が高かった。都市化、工業化の進んだ地域ほど、この傾向が見られた。これは都市部において、社会的統制が弱まったためだと考えられる。しかし地域によっては、独自の理由によるものもあった。

今後の課題として、こうしたテーマをより明確にするには、個人の日記や社会を風刺した民衆の記録など、質的な資料を積み重ねることで精度を高めていくしかないと考えられる。

〈注〉

(1) 当時の映画について例を挙げると、次のような内容があった。

ムーランルージュの様子を見せたり、男女の性交を描写したドキュメンタリー映画があった (Stokvis 1913, p. 28)。

『許しの値段』という映画では、酒を飲んで酔っぱらい、女が男の上に跨っていた (Stokvis 1913, p. 32)。

『同時に手渡す』という映画では、妻を失った夫とその息子が、隣の家に住む未亡人とその娘と関係を持つ。はじめは、夫と未亡人、息子と娘の関係だったが、後にパートナーを交換して、夫と娘、未亡人と息子が性行為に及んだ (Stokvis 1913, p. 70)。

映画に関する報告書 (1913年5月) には、当時上映された映画250本のうち、51本に不倫、25本に尻軽女の性行為描写があったと記されている (Stokvis 1913, p. 54)。

性に関する表現は、映画だけでなくラジオ放送でも問題となっていた。そのため、1930年代にはラジオ放送の検閲が行われ、性表現が規制された。

(2) インタビューを行ったのは、1997年7月20日、ナーベル氏の自宅である。当時77歳の彼女は、快くインタビューに応じてくれた。世間話を交えながら3時間ほどに及ぶ質問をしたが、当時の様子を鮮明に話した。

氏は、両親と兄弟 (男5人女5人) の12人家族の9番目の子として1920年に生まれた。父は工場労働者、母は専業主婦であった。生まれは北ホラント州の田舎町 Uitgeest であるが、7歳の時に北ホラント州の新興工業地 Vormerveer に移り住んだ。22歳で結婚するまで、家族と一緒にこの町に住んだ。平均的な労働者の家庭で育った彼女は、初等教育を終えた後、家事手伝いを経て、15歳から1年半の間、他の家の家政婦をした。20歳までは、不定期に家政婦のアルバイトをしながら過ごした。

(3) 商工業が盛んな地域でも、昔からその土地に住んでいる人が多い所では社会的統制が強く、保守的な道徳観が根強くあったため、非嫡出子の割合は低かった。その土地に長く住んでいる男女の間に子どもができたならば、多くの場合、出産前に結婚した。非嫡出子を出産した多くは、移住してきた労働者であった (Kok 1991, p. 145)。

〈引用・参考文献〉

- Braure, Maurice 1974, 西村六郎訳『オランダ史』白水社1994。
- Centraal bureau voor de statistiek 1959, *Zestig jaren statistiek in tijdreeksen*, Uitgeversmat schappij W. de Haan N.V. Zeist.
- Daalder, H 1985, “Politieke Instellingen en Politieke Partijen” in *De Nederlandse Samenleving sinds 1815*, red. F.I. van Holthoorn, Van Gorcum, Assen/Maastricht.
- Franssen, J.J.M 1976, *De bossche arbeider in zijn werk en leefmilieu in de tweede helft van de negentiende eeuw*, Stichting Zuidelijk Historisch Contact Tilburg.
- Giele, Jacques 1979, *Arbeidersleven in Nederland 1850–1914*, Socialistische Uitgeverij Nijmegen.
- Goode, William J 1977, 松尾精文訳『社会学の基本的な考え方』而立書房1991。
- Kok, J 1991, *Langs verboden wegen De achtergronden van buitenechtelijke geboorten in Noord-Holland 1812–1914*, Historische Vereniging Holland en Uitgeverij Verloren Hilversum.
- 栗原福也 1988, 『ベネルクス現代史』山川出版社。
- Regt, Ali de 1977, “Arbeidersgezinnen en industrialisatie: ontwikkelingen in Nederland 1880–1918” in *Het Amsterdams Sociologische Tijdschrift*, Vierde jaargang nummer 1.
- Stokvis, Simon 1913, *Het Amsterdamsche schoolkind en de bioscoop*,

Amsterdam Uitgevers Maatschappij.

Wintle, Michael 2000, *An economic and social history of the Netherlands 1800–1920*, Cambridge University Press.

(2013年11月5日受理)